

ルセリア・イトワール (JC時代)

JS時代の触手星人との激闘を終えて
進学した璃星の变身した姿。
まっすぐ下ろした髪を纏め
少し雰囲気が変わったのを
友人には言われたり。

思春期に入ったことを
肉兄さんと呼んを慕ったのを
彼に対して素直になれなく
なってしまう。
そのことに悩むことも。

強さとしては全盛期を
莫大に魔力はそのままに
JS時代の戦闘経験を活かして戦う。

まだまだ精神的には脆い部分もあるが
機械帝国との戦いの際にはそれを
突かれて捕らえられ、
全身を開発され洗脳調教を受けることになる。



ヲアト・ヒゼリア

機械帝国『ギアロス』第43侵略部隊所属の科学者。
部隊を指揮する幹部『オルディス・ヴァフ』の直属の
部下であり、人体実験大好きな科学技術部門の責任者。
侵略部隊が捕縛した現地の生物を調査することが主な仕事だが
生体調査などの雑事は全て部下に任せ
自身は捕らえたヒロイフの身体を弄ることが執心している。
これまで数多くの世界のヒロイフを洗脳改造・調教してきたおり
その成果を以て部隊の世界侵攻を成功に導いてきた。

生来より機械・科学技術への異常な興味と才能を持ち合わせて
いたが、ヲアトが生まれた世界では自然と共にあることが礼賛され
先進技術は忌むべき魔の業として厳しく統制されていた。
それをも嬉々として科学実験をしながらのヲアトは異端者として
捕らえられ、幼少より幽閉されて過ごしてきた。
そんな環境にあっても部屋を様々な思考実験を楽しんでいたある日、
他次元を侵略する機械帝国『ギアロス』が侵攻してくる。
その侵略部隊の幹部『オルディス・ヴァフ』によって才能を
見出されたヲアトは彼の部下となり、侵略命令から逸脱しすぎない
範囲ではあるが様々な実験をすることが許される日々を過ごす。
彼女にあって、それは何よりも幸せなことであった。
自身の手を対象が『変化』する瞬間は、最大の幸福だった。



「――あ、オルデイス様。どうされたんですか。
捕まえた娘の様子を見に来た……?」

「オルデイス様が『素材』を気にされるなんて珍しいですね。
にへっ、存分にご覧になってください」

「くっ……うう……」

（だめ、全然びくともしない……）

「今回の『素材』は活きがいいですね……にへへっ、楽しみです」



「あなたは……！私を殺さず捕まえるなんて何が目的ですか！」
「ふええっ、怖い……あ、あの、オルディス様は寡黙なのであたしが
答えますう……」

「あ、あたしはシアト・ミゼリアと言います。貴女の改造担当者です」



「か、改造……?」

「あたし達は色んな世界を侵略してますけど、当然抵抗はされるわけですし。そんな中にたまにいますよ。貴女みたいな

強い力を持った人間が……

オルデイス様は強いので負けたことはありませんが」

「そう考えると今回少し苦戦されてたのは凄いことですね」



「で、折角強い力を持っていたり強靱な精神力を持ってるのに
そのまま殺してしまうのって勿体ないじゃないですか。
どうせなら戦力に組み込めないかなーと……」

「色々思案した結果、相手を捕らえることになったわけです」



「戦力………？ 誰があなた達なんかに力を貸すのですか！」
「ひえっ、大きな声出さないで………まあそれはご尤もなんですよね……
そういう人ほど自分たちの世界を護る覚悟があるわけですし」

「だからまあ、戦力になるように仕向けようかなあと」



「な、何を……」

「対象の心身を作り変えて、オルデイス様の忠実な下僕^{しもべ}とする……
そういう改造を施すんですよ」

「機械ほど簡単じゃありませんが、可能であるのは実証済みです」



「あ、うっ……！」

「にへっ……まず手始めに貴女の身体を弄りますね。
ちょっと冷たいかもしれませんが、最初だけですから」

「な、何か背中から身体に流れてきて……！」



「っ！はあ、はあ……」

「興奮剤投与、問題なし、と。」

「これまでもそうだったけど、どれだけ若くても女の子はちゃんと

『雌』なんだなあって思いますよ」

（身体、熱い……！この感じ……媚薬……！）



「ん？この数値の上がり方は……あ、にへへ。」

貴女、過去にえっちな仕打ちを受けたことがあるんですねえ」

「うっ、うるせえ……」

「そういうことでしたら、ちょっと一回絶頂してもらいましょうか」



「い、いや、こんな、簡単につ……！ あう、んあああつ♡」

自動で弱いところを感知しますので、抵抗は無理ですよ」



「おお、良いいきっぷりです。感度は申し分ないですねえ」

「ああッ！んああああああッ♡♡」



「それでは次は『勉強』の時間ですね」

（こんな、簡単に、イカされて……く、悔しい……!!）



「べ、勉強……?」

「そうです。『経験』はあれど『知識』が追いついていないかなあと。
オルデイス様は戦いの後ひどく昂るので、雌としての扇情さも
必須になってくるわけです」

「その辺も淑女の嗜みというやつですね」



「そ、そんなものいらないっ!」

「だ、大丈夫ですよ。お勉強が苦手な人でもちゃんと学習できる
ように脳に教え込みますので」

「そういうことじゃ—」

「それではしっかり覚えてくださいね」



「あ、ぐっ！うああああッ！」

「初期段階で抵抗心もありますので、主に性知識の書き込みや条件反射の刷り込み程度にしておきますね」

（あ、頭に、何か、流れ込んできてっ………！）

「あ、はあッ！お、まん、っ………いやっ、そんな言葉、いらないッ！」



「にへへっ 無知な娘に教え込むのは本当に楽しいですねえ……」

「うーく、うううッ………！ ペペニスっ………扱き方………」

「こんなのっ………覚えたく、ないっ………うううッ………！」

「さてさて。この間に簡単な肉体改造だけ施しますねえ」



「オルディス様に特筆するような嗜好はありませんが、
やはり奉仕する際にはある程度の胸があったほうが良いと思います。
ついでに力を奪いやすくする措置も施しておきますね」

「ではこちらにもスイッチオン、と」



「っ、ああッ！なに、乳首、痛ッ！」

ああ、フェラッ、やだッ、そんなの、覚えさせないでえッ………！」

「ひとまずは一時間程この状態でおいておきます。」

あたしはこのまま見ていきますのでオルディス様はご休憩なされて………」

「……一緒にご覧になる、ですか？にへっっどうぞどうぞ」



「乳首、乳輪からパンパンに腫れ上がって、痛そうですね。
でもその痛さは既にむず痒い媚熱へと変換されているはずです。
徐々に進めますが、痛みを快楽と感じることには脳を慣れさせます」

「そしてここで先程よりも濃度の高い薬品を投入すると……」





「かつ、は、あッ!? はあッ、はあッ、はあッ!」

「おお、綺麗に全身ピンク色になりましたね。
湯気も立ち上ってほっかほかです」

「はッ、だ、だめっ……くるっ……いい、いく時は、いくと宣言っ……
そんなの、絶対に、言わなっ……ああッ!?」

「いやっ、だめ、いく、いくっ……やだっ、私、またいくッ!」





「ああ、いやああッ♡♡♡
イ、イくっ♡イっくううう♡♡♡」

「~~~~♡ハァッ、ハァッ、ハァッー」

「体内の魔力を乳腺と関連付け、絶頂と同時に母乳と共に噴出……
『加工』は問題なくいきましたね。」

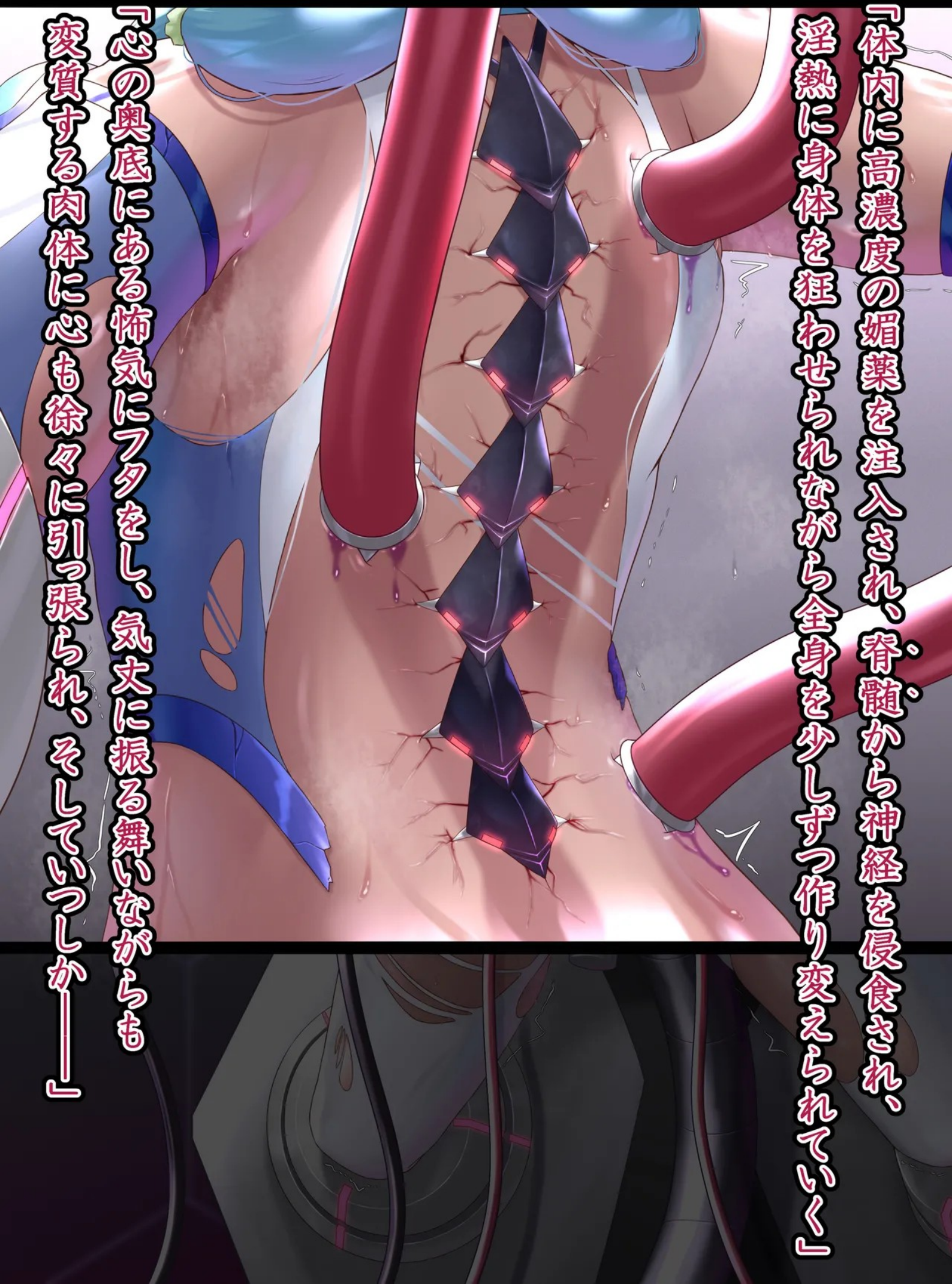
後はこれを何度も繰り返して『体質』になるよう癖づけます」

「……それにしても、美しいですよねえ……」



「体内に高濃度の媚薬を注入され、脊髄から神経を侵食され、淫熱に身体を狂わせられながら全身を少しずつ作り変えられていく」

「心の奥底にある怖気にフタをし、気丈に振る舞いながらも変質する肉体に心も徐々に引っ張られ、そしていつしか――」



「……にへへ。」

あたしはそれが見たくてこんな改造実験をしてるのかもしれませんが」

「オルデイス様も彼女——ルセリア・エトワールが気になってるご様子。
必ずや最高の奴隷兵——『スレイドール』に仕上げてみせますね」

「イクイクイクイクイク♡♡
おまんこイッチャウウウウウ♡♡」



「にへっ……間隔が早まってますねえ。良い傾向です。」

これなら15分後くらいにはわかりやすい変化が出るでしょう」

「それを見た時の彼女がどう反応するか、楽しみです……」



「イグッ♡イグううううううッ♡♡」

「はい、では一旦小休止です」



「おーん.....おーん.....」

「エトワールさん。学習の程はいかがですかあ？」
「……………」

「んー、ちょっと聞こえませんね」



「私は……こんなことで、絶対に負けたりしない……!!」

あなた達を倒して、必ずおに——皆のところに帰る……!!」

（おに……?）

「それは怖いですね。ところでそのおっぱい、気に入ってもらえました?」





「さっ」

「なッ……なに、これッ！」

あ、うそッ……これ、私のおっぱい……!?

そ、それにこれ……な、なんで母乳が……」

「ああ……素敵反応ですねえ……！」



「母乳と一緒に魔力も噴出したので、全然回復してないでしょう？」
（ほ、本当だ……戦ってからかなり時間が経ってるはずなのに
魔力がほとんど戻ってない……!）」

「ちなみに細胞を弄ってるので基本的に元には戻せません。不可逆です」
「そんな身体になってもまだ『ギアロス』と戦いますか？」

「……っ！ た、たとえ身体を弄られたって諦めない……！」

私の心が私である限りは、絶対に屈したりしない……！」

「はあく……素晴らしく高潔な心の持ち主ですね。」

感度抜群の絶頂母乳噴出体質になっても、心までは侵されていないと」

「そうですッ！ こんなドスケベ発情雌牛体質にされたって、私は——」

「えっ？ 私、今なんて……」

「おお。『知識』がしっかり定着してますね。」

無意識に使ってしまうほど貴女の言語野にはちゃんと刷り込まれて

います」

「あ……そん、な……」

「にへっ……良い表情です。ではその学習の続きを再開しますね」



「……っ！や、やめて！これ以上変なこと覚えさせないでッ！」
「変なことではありません。全てオルディス様に仕えるために
必要なことです」

「今度は最大出力でいきますね。しっかり学んで下さい」



「あッ、あがッ、う、あああああッ!!」

「ぐッがッ、あああああッ!?」



（おまんこっ、おちんぽっ、パイズリっ、フェラチオっ、素股っ、
アナルっ、腋コキっ、足コキっ、セックスっ、セックスっ、セックスっ）
「……うわあ。入力データをちらっと見ましたけれど
凄いことになってますね……」

これを一時間はたとえ未通女だって立派な娼婦に大変身ですよ」

「この出力まで上げたのは本当に久しぶりでしたからねえ……」

「おお、おおおおおッ♡♡イく、イきますっ♡

雌牛発情おまんこイきますすうううッ♡♡」

「ルセリア・エトワール……にへっ……

こんなにワクワクする『素材』は滅多に出会えませんからね」

「じゅわっ、すっかり……かわいくしてあげるからねえ……♡」

「次の絶頂あたりが最後ですね。それで完了です」

「エトワールさん、初、等、学、習、の、修、了、を、宣、言、し、て、く、だ、さ、い、ね、え」





「お——おおおおおッッ♡♡

淫乱雌牛おまんこッ、イきますううううッ♡♡♡」



『……………』

「はい、これで初期工程は完了しました。
オルデイス様、お暇ではありませんでしたか？」

ガ
クッ

「中々楽しめた、ですか。にへへ、それは何よりです」



「……あたしの方こそ愉しそう？」

にへへっ。オルディス様はあたしなんかの態度も見逃さないんですねえ。
はいっ、楽しくて愉しくて仕方ありません」

「ルセリア・エトワールという最高の『素材』をどう扱っていくのか……」





「今からそれを考えるだけで、もう最高に幸せなんです」







































































